

12世紀シトー会写本の挿絵芸術

—修道院長ステファヌスと「シトー派第一様式」

近藤真彫

The 12th-century Cistercian Manuscript Illuminations

Stepen Harding and the 1st style of Cîteaux

KONDO Mahori

I. 序：シトー会芸術と聖ベルナルドゥス

1098年、フランス、ブルゴーニュ地方のディジョン近郊に、聖ベネディクトゥスの『戒律』の遵守を求めた一群の修道士たちが「新修道院 (Novum Monasterium)」を創設した。11世紀には西欧社会が安定し始め、農耕の充実や都市の復興といった内部の発展や、十字軍遠征にみられるような外への拡大がみられる。12世紀ルネサンスとも呼ばれる知的運動が起こってくる一方、修道院改革の波に乗り12世紀を通じて大修道会へと発展するシトー会は、中世ヨーロッパの宗教史において特筆すべき地位を築いたが、ロマネスク芸術という同時代の美術の展開のなかでも大きな役割を果たした。

12世紀のシトー会といえば、クレルヴォーのベルナルドゥス (1090-1153) のカリスマ的存在なしに語ることはできない。時に彼がシトー会の創設者と誤解されるほど、1113年の彼の入信以後の同修道会の発展は目覚ましいものであった。入信を怖れて、妻は夫を、母は息子を、その説教から遠ざけたといわれるほどのベルナルドゥスの弁論の力はまた、芸術を語る際にも発揮された。

「しかし、修道院 (禁域) において書を読む修道士の面前にある、あのような滑稽な怪物や、驚くほど歪められた美、もしくは美しくも歪められたものは何のためなのか。そこにある汚らわしい猿、猛々しい獅子、奇怪なケンタウルス、半人半魚の怪物、斑の虎、戦う戦士、角笛を吹き鳴らす獵師は何なのか。(中略) 一言で言って、驚くほど多様な姿をしたさまざまな像が、数多くいたるところにあるために、修道士は書物よりも大理石を読み解こうとし、神の掟を黙想するよりも、日がなこれら奇怪なものを一つ一つ愛でていたくなるだろ

う。おお、神よ。こんな馬鹿げたことを恥じないまでも、なぜせめて浪費を悔やまないの
 であろうか¹。』

1125年にベルナルドゥスがクリュニーの修道院長に宛てた『ギヨーム修道院長への弁明
 (Apologia ad Guillelmum abbatem)』(以下、『弁明』)は、修道院の在り方について、当時
 最大の勢力を誇るクリュニー会に対してシトー会からの見解を述べたもので、なかでも上記
 の引用を含む「諸修道院内の絵画、彫刻、金銀について」の項目は、当時の美学思想を伝える
 数少ない言説ともなっている。ベルナルドゥスの「驚くほど歪められた美、もしくは美しく
 も歪められたもの」への批判は、ロマネスク美術として分類されるこの時代の芸術の特徴
 をあまりにも的確に描写していることから、さまざまな美術書で判を押したように引用され
 てきた。現在世界遺産に登録されるフォントネー修道院をはじめとするシトー会建築は、そ
 の無装飾性において豊かな彫刻群で飾られた同時代の聖堂建築と一線を画し、卓越した技術
 とプロポーションの美によって知られる。ベルナルドゥスの言葉は、そうしたシトー会の造
 形的禁欲主義のイメージを裏付けるものとしても受け入れられてきたのである。

しかしながら、12世紀シトー会の芸術史において、以上のような禁欲のイメージとは異



挿図 1: 『ヨブ記講解』第28書
 (Dijon BM, MS. 173, fol. 103v.)

なる活動が先行していたことを忘れてはならない。当地のスクリプトリウムでおおよそ12世紀第一四半期
 に制作された写本群を飾る挿絵は、西欧中世写本芸術
 の白眉として紹介されてきた。特に、「シトー派第一
 様式」として分類される初期作例のなかには、まさに
 ベルナルドゥスの批判に相当するような奇想にあふれた
 図像が数多く登場する(挿図1)。『弁明』が示すベ
 ルナルドゥスの装飾批判のシトー会芸術への影響につ
 いては、C. ルドルフらによりさまざまな研究がなさ
 れてきた一方で²、こうした初期シトー写本芸術との
 関連性についてはほとんど語られてこなかった。本論
 は、分断的にしか言及されてこなかった初期シトー会
 の写本芸術とその制作背景を整理することで、ベルナ
 ルドゥスと無装飾主義への流れを含めた12世紀シ
 トー派芸術の全体像を把握する一助となることを目的

¹ 杉崎泰一郎訳「ギヨーム修道院長への弁明」『中世思想原典集成10 修道院神学』上智大学中世思想研究所
 編訳/監修、平凡社、1997年、pp. 455-489の全訳のうちp. 484より引用。(中略)は筆者による。

² Rudolph, Conrad. 'The Principal Founders and the Early Artistic Legislation of Cîteaux,' *Studies in
 Cistercian Art and Architecture III* (M.P. Lillich ed.), Kalamazoo, Michigan, 1987, pp. 1-45; 'Things of
 Greater Importance', *Bernard of Clairvaux's Apologia and the Medieval Attitude Toward Art*,
 Philadelphia, 1990, pp. 133-157; 駒田亜紀子「聖ベルナルドゥスと初期シトー会の言説における『聖像論争』
 『西洋美術研究』no. 6, 2001年、pp. 140-145などに詳しい。

とするものである。

II. シトー会草創期と写本制作の環境

シトー修道院で制作された挿絵付き写本のほとんどは、革命時の1790年に修道院が解体されてから現在にいたるまでディジョン市立図書館に収蔵されており、現在のところ1991年に出版されたカタログが最新の基本データを提供している³。1098年に創設された修道院において制作されたと考えられる現存最古の写本は1111年頃に編年される『聖書』（以下、『シトーの聖書』）であり、Y. ザウスカはこれに続く12世紀のシトー写本にあらわされた挿絵装飾を、その芸術的特徴に従って「第一様式」、「第二様式」、「モノクローム様式」に分類した⁴。何らかの図像をあらわした挿絵を含むのは、「モノクローム様式」が始まる1140年代頃までの作例が該当し、それらのほとんどが第三代修道院長ステファヌス・ハルディングス（在1109-1133）の治世に制作されたものとなる。本項では、これまで重ねられてきた初期シトー会史研究をもとに、修道会の基礎固めの一環であった写本制作の概要をまとめてみたい。

新修道院創設のほぼ10年後に修道院長となったステファヌスは、創始者であるロベルトゥスと共にモレームからシトーに移ってきた21名の修道士たちのひとりであり、会則の制定や典礼の改革を行うなど、実質的にシトー会の組織の基礎を築きあげた。初期のシトー修道会についてを教える主な資料としては、『創立小史 (Exordium parvum)』、初期および後期の『愛の憲章 (Carta caritatis)』、『創立史 (Exordium magnum)』その他にシトー会総会決議集などがある⁵。これらの草案はステファヌスの下で早い時期から準備されていたと考えられるものの、明確な作成年次については未だ議論が重ねられている。創設後の数十年からの資料はほとんど残されていない状況で、以上の文書などを辿ることによって、シトー修道院の草創期の状態は徐々に明らかにされてきている状況といえる。

聖ベルナルドゥスに重点を置くシトー会史のレトリックとしては、新修道院創設後のさまざまな困難を強調して、息も絶え絶えであった修道院をベルナルドゥスが奇跡的に救ったかのように1113年の彼の入信を位置づけるものがある。実際は、土地の開墾や修道院の建設に伴う労働、それに加えて創始者ロベルトゥスの離脱、入信者の不足などいくらかの困難には見舞われたものの、創設後の修道院の営みは辛苦を極めたというものでもなく⁶、スクリプ

³ Załuska, Yolanta. *Manuscripts Enluminés de Dijon*, Paris, 1991.

⁴ Załuska, Yolanta. *L'Enluminure et le Scriptorium de Cîteaux au XIIe Siècle*, Cîteaux, 1989, p. 12.

⁵ ARCCIS, *Origines Cisterciennes: Les plus anciens texts*, Paris, 1998. 我が国での翻訳、研究は、今野國雄『西欧中世の社会と教会』岩波書店、1973年、pp. 270-354。灯台の聖母トラピスト大修道院編『シトー修道会初期文書集』中央出版社、1989年。神崎忠昭訳「愛の憲章（後期の）」『中世思想原典集成10 修道院神学』上智大学中世思想研究所 編訳/監修、平凡社、1997年、pp. 152-178などに詳しい。

⁶ 岸ちづ子「シトー修道院の初期所領（1）」『福岡女子短大紀要』第38号（平成元年）、pp. 85-98参照。

トリウムにおいても、第二代修道院長アルベリクス（在1099-1109）の時代から、必要な写本を整える作業が着実に進んでいたことがうかがえる⁷。蔵書の充実は、新しい修道院にとって不可欠である。職務に必要な典礼書を備えるためだけでなく、ベネディクトゥスの『戒律』第48章にもあるように修道生活の一部として個人的な読書も奨励されていた⁸。1099年のロベルトゥスへの帰還要請などからうかがえるように、シトー会創設者たちの出身であるモレーム修道院とは友好ではなかったことから、当時の慣行であった出身修道院からの写本の贈与はあまり期待できない状況であっただろう⁹。ロベルトゥスによってシトー修道院に残されたと想定される写本も存在するが、ほとんどの写本は新修道院で制作されたと考えることができる。

修道院長ステファヌスの名が入った現存最古の記録は、1109年の「訓戒 (Monitum)」である (Dijon BM, MS 13, fol. 150v.)¹⁰。これは、先述の『シトーの聖書』の第一巻の最後に記されたもので、創設まもないシトーでの写本制作の状況をうかがううえで重要な情報を提供している。そこでは、本聖書がそれ以降にシトー会で使用されるすべての聖書の手本となるべく制作され、そのために厳密なテキストの校訂が行われた様子が細かに記されている。修道生活のあらゆる面で「原点への回帰」を求めたステファヌスは¹¹、シトー会聖書の定本として最も正確なヒエロニムスのウルガタ訳テキストを残そうと努めた。彼は、さまざまな教会から聖書写本を集めてそれらのテキストを比較した結果、各テキスト間に相違を見出す。注意深く各テキストを検討しつつ、ユダヤ教のラビを呼んで疑いのある個所について質問し、必要と判断すれば訂正、あるいは削除した。こうして得られたテキストは、今後一切変更すべきでないと言い渡され、「訓戒」は締めくくられる。そこでの記述からは、新しい修道会のために霊的な統一性を築こうとするステファヌスの厳格な意志と、それを遂行するに足る当時のシトーのスクリプトリウムの高い知的環境を知ることができる。

『シトーの聖書』をはじめ、シトーで使用する基本的な蔵書は1114年に揃え終わったと考えられる¹²。これらが時の修道院長ステファヌスの指示によって優先的に制作されたもので

⁷ 詩篇の諸語彙についての質問に対してポティエル修道院長ランベルトゥスが回答したアルベリクスへの書簡が残されている。岸ちづ子「初期シトー会と〈手の労働〉」『福岡女子短大紀要』第19号（昭和55年）、pp. 84-85より。

⁸ 古田暁訳『聖ベネディクトの戒律』すえもりブックス、2000年、pp. 188-193の第48章を参照。

⁹ 岸ちづ子「初期シトー会と〈手の労働〉」『福岡女子短大紀要』第23号（昭和57年）、pp. 43-44参照。

¹⁰ Stercal, Claudio. *Stefano Harding. Elementi biografici e testi*, Milan, 2001. (以下、参照頁は英訳版から。trans. by M. F. Krieg. *Stephen Harding—A Biographical Sketch and Texts*, Kalamazoo, Michigan, 2008.) pp. 39-55. Załuska, 1989, pp. 70-73.

¹¹ こうした方針は、典礼での聖歌の考証の様子を記した同時期の書簡からもうかがえる。Stercal, 2001, pp. 56-67; Waddell, Chrysogonus. 'The Molesme Cistercian Hymnal,' *The New Monastery—Texts and Studies on the Early Cistercians* (E. R. Elder ed.), Kalamazoo, Michigan, 1998, pp. 79-86.

¹² 岸ちづ子「初期シトー会と〈手の労働〉」『福岡女子短大紀要』第23号（昭和57年）、p. 44参照。シトー修道院の蔵書については、Załuska, 1989, pp. 15-33.

あることは間違いない。そして、この写本群に描かれた挿絵の様式もほぼ共通するタイプを示しており、これが「第一様式」として分類される写本群となっている。この前後の数年間には、シトーの初期の歴史においてひとつの転換期ととらえられるだろう。まず、1113年はベルナルドゥスのシトー会への入信があった。そして、ラ・フェルテに初めての子院が設立される。1114年には、ポンティニーに、更にその翌年には、モリモンとクレルヴォーとに二つの子院が置かれた。このクレルヴォーには25歳のベルナルドゥスが長として送られることになる。修道院長ステファヌスの治世は続くが、これ以後、修道会はシトーを本拠地として大きな拡大期を迎えることになり、芸術様式も次の段階へと移っていく。

Ⅲ. 修道院長ステファヌスと「シトー派第一様式」

前項では、1109年頃から1110年代半ば頃にかけて、シトーのスクリプトリウムで修道会の基礎固めの一環として写本の制作がすすめられたことをみた。こうした写本の制作は、新しい修道院に必要な蔵書を整えるという物理的な要求を満たすだけでなく、シトー会の宗教理念そのものを整える作業であったことがわかる。その立役者が修道院長ステファヌスであった。図像がどのように選択されたのか、どのように制作されたか、どういった画家の手になったのか、などといった挿絵の制作背景を伝える文字資料は存在しないが、少なくとも、テキストの厳密な校訂を行ったと同様の知的環境のもと修道院長の指揮下ですすめられたことは間違いないだろう。本項では、12世紀のシトー写本の挿絵芸術のなかでも、「第一様式」、つまり、シトー会創設時の精神をステファヌスがとりわけ注ぎこんだと想定される写本群の挿絵について、その研究史と問題点をまとめてみたい。

12世紀シトー会の写本挿絵についての体系的研究は、1923年から1926年にかけてディジョン市立図書館の館長を務めたC.ウールセルによって初めて成されたといえる。彼は、ディジョン市立図書館所蔵のシトー写本の代表作について制作年代、来歴、様式を体系的に纏めたモノグラフを出版した¹³。歴史的背景に多くが割かれ、各挿絵に関する具体的な考察は不十分ではあるが、基礎資料としての価値、そしてシトー写本の挿絵芸術の美術史上の価値を世に知らせた貢献は大きい。ウールセル以後は、前述のY.ザウスカによるより詳細なモノグラフが出され、現在にいたるまで、この研究成果が12世紀シトー会の写本挿絵研究の基盤となっている¹⁴。

¹³ Oursel, Charles. *La Miniature du XIIIe Siècle à l'Abbaye de Cîteaux d'après les manuscrits de la Bibliothèque de Dijon*, Dijon, 1926. ウールセル以前のシトーの写本挿絵についての言及は、以下を参照。Oursel, Charles. *Miniatures Cisterciennes (1109-1134)*, Mâcon, 1960, p. 8.

¹⁴ Załuska, Yolanta. 1989. この成果に続き1990年出版のディジョン市立図書館の写本カタログも担当した(註3参照)。



挿図2:『シトーの聖書』ユディト書
(Dijon BM, MS. 14, fol. 158)

「シトー派第一様式」の挿絵を含む現存写本は、前述の『シトーの聖書』の第二巻¹⁵、そしてグレゴリウスの『ヨブ記講解 (Moralia in Job)』¹⁶、アウグスティヌスの『詩篇註解 (Errationes in Psalmos)』¹⁷があり、写本の点数のみを考えると必ずしも多くはない¹⁸。しかし、テキストを飾るミニアチュールおよびイニシアルの総数は100点近くを数え、その芸術的な完成度の高さから、フランス・ロマネスク写本挿絵芸術の代表例のひとつとして位置付けられてきた。

『シトーの聖書』は、従来の聖書の挿絵伝統に添って、基本的にはテキストに語られるエピソードを絵画化したミニアチュールと物語イニシアルで飾られている(挿図2)。一方、聖書のように定形化された装飾プログラムがなかったと考えられる『ヨブ記講解』においては、先のベルナルドゥスの装飾批判にそのままあてはまる怪物を絡めた動植物たち、あるいは、世俗の風俗をうつしたかのような騎士の姿

(挿図3)、農作業に励む修道士たち(挿図4)などといった、よりバラエティーに富んだ図像をスタティックな文字に組み込んだイニシアルがテキストの間に置かれる。このような数々のイニシアルは、「シトー派第一様式」の画家の卓越した造形感覚と図像形成のオリジナリティーを伝えるものとして、とりわけ注目されてきた。

「シトー派第一様式」の挿絵を論じる際、しばしば「人物たちの生き生きとした動き」、「鋭いリアリズム」といった表現が使われる。シトー挿絵の「リアリズム」は、人物たちの動きや表情にみとれるだけでなく、服飾や武具などのディテールにもあらわれている。これらのディテールは同時代の風俗を巧みに取り入れたもので、文字資料の希少な時代の歴史的資料として扱うこともできる¹⁹。一方、C. デヴィッドソンは、後期アングロ・サクソン写

¹⁵ 1111年頃制作とされる。Dijon BM, MSS 14, 15. Załuska, 1991, cat. 23.

¹⁶ 第一巻から三巻は1111年、第四巻は1110年代に完成したと考えられる。(Dijon BM, MSS 168, 169, 170, 173.) Załuska, 1991, cats. 24, 25.

¹⁷ 12世紀第一四半期とやや遅く編年されているが、挿絵の様式から見て制作に取りかかったのは上の二点と同時期と推察される。(Dijon BM, MSS 145, 146, 147.) Załuska, 1991, cat. 26.

¹⁸ やや類似する様式を示すものとしてザウースカは、MSS127, 135, 153, 158も挙げている。Załuska, Yolanta, 1989, pp. 82-85.

¹⁹ J. ハリスは、12世紀初頭のイギリスの聖職者の世俗文化批判の記述から、写本挿絵にしばしば登場する、先の細く尖った靴、袖口の広がった長い袖、大きくスリットの入った長い衣などは、当時の貴族の間で流行していた服装と呼応することを指摘している。Harris, Jennifer. *Romanesque-Byzantine Elements in French and English Dress 1050-1180* (University of Manchester, Ph.D. diss.), 1977. また、P. グラは、『シトーの聖書』や『バイユーのタピスリー』に見られる、文様が描かれたアーモンド型の盾は、12世紀に発達する紋章の初期段階を示していると述べる。Gras, Pierre. 'Aux Origines de l'Héraldique. La Décoration des Boucliers au Début du XII Siècle d'après la Bible de Cîteaux', *Bibliothèque de l'École des Chartes*, CIX, 1951, pp. 198-208.



挿図 3：『ヨブ記講解』第35書
(Dijon BM, MS. 173, fol. 174)

確化は、シトーの芸術環境の豊かさを示す一方で、シトー挿絵にある新しい要素を浮き彫りにして、そこに挿入された同時代性をほぼ確証することにも寄与している。

以上のような特徴と併せて、「シトー派第一様式」は、当初からその「イギリス性」が指摘されてきた。リアリズムやユーモアの要素だけでなく、様式的には、J.ポルシェは、ここでの淡彩線描画は、同時代のフランスには見出されないイギリス絵



挿図 4：『ヨブ記講解』第15書
(Dijon BM, MS. 170, fol. 59)

画の特徴とみなし²¹、C.ドッドウェルは、人間や動物を間に絡めた植物文様はアングロ・サクソン美術からの影響があるとし、また、シトーの挿絵に登場する人体のプロポーションは、12世紀前半のイギリスロマネスク写本挿絵のそれと呼応すると指摘する²²。こうした碩学たちの概説的な言及は否定させることなく踏襲されてきたが、中世芸術は広範なネットワークのなかで展開したのであり、地域的な芸術的特質のみで直接の影響関係を断定するこ

²⁰ 大英図書館所蔵のCotton Ms. Julius A. VI.にあらわされた月暦図との比較を行った。Davidson, C. T. 'Sources for the Initials of the Cîteaux MORALIA IN JOB', *Studies in Cistercian Art and Architecture III* (M.P. Lillich ed.), Kalamazoo, 1987, pp. 46-68.

²¹ Porcher, Jean. *L'Enluminure Française*, Paris, 1959.

²² Dodwell, C. R. *The Pictorial Arts of the west 800-1200*, 1993, pp. 212-213.

とはできない²³。さらに問題にすべきは、「シトー派第一様式」の「イギリス性」は、修道院長の出身地がイングランドであったことで説明されてきた傾向である²⁴。

ステファヌスの経歴については、イギリス人のベネディクト会士であり歴史家のマームズベリのウィレムス（1080頃-1142頃）の著作『イングランド諸王の事跡（De gestis regum Anglorum）』（1125年頃）などに伝えられる²⁵。ステファヌスは1060年頃にイングランドで生まれ、シャーボーンにあるベネディクト会の修道院で幼年を過ごしたとされる。のち、スコットランドやパリで教育を受け、ローマへの巡礼を果たした復路のフランスでシトー会創設に関わるようになった。こうした経歴の詳細については更なる検証が必要であるが、少なくとも、修道院長となったステファヌスはヨーロッパ各地で豊富な学識と宗教的経験を積んだ人物であったと想定される。さらに、当時の宗教界の広範な交流を忘れてはならない。先に紹介した聖書の「訓戒」には、テキスト校訂の際に、いくつかの教会からシトーのスクリプトリウムに写本が集められたことが記されていたが、そうした写本が挿絵付きのもので、そこからシトーの画家が影響を受けた可能性もある。修道院長の出身地がイギリスという点だけで、シトー芸術とイギリスとの関連を語ることはできないのである。

ステファヌスの芸術経験や、シトーにおける挿絵制作について伝える文字資料が存在しないうなかでは、シトーの挿絵そのものが何をあらわそうとしているのかを慎重に整理していくことがこの問題の解決への鍵となるだろう。「シトー派第一様式」の芸術は、一見するにユーモアと豊かなファンタジーで知られるが、その奥では図像プログラムにおける精神性の高さが示される。既にいくつかの図像研究において、シトーの挿絵にはキリスト教教義の深い理解や同時代の宗教的論争への関心が反映されていることが明らかになっている²⁶。また、C.ルドルフは、『ヨブ記講解』の挿絵とテキストとの相関性を検討した結果、シトーの画家がテキストの内容や教義上の意義を十分に理解した修道士であったと推定する²⁷。「シトー派第一様式」の挿絵芸術とステファヌスとの関係については、ステファヌスの出自のみに注目するのではなく、彼が修道院長として新しいシトー会の基盤を整えた精神性を、図像から読み取っていくことが今後の課題といえるだろう。

²³ この問題については以下の拙論で、北フランス芸術との関係性を論じた。“Englishness of Cistercian Art? Notes on Pictorial Sources of the Life of David in the Cîteaux Bible,” *Aspects of Problems in Western Art History* (東京芸術大学西洋美術史研究室紀要), vol. 4, 2003, pp. 53-59.

²⁴ イギリス美術およびステファヌスの出自の関連については以下にまとめられている。Zaluska, 1989, p. 76.

²⁵ W. Stubbs, *Rerum Britannicarum Medii Aevi Scriptores*, vol. 90/1-2, London, 1887-1889; ARCCIS, 1998, pp. 154-165. その他、ステファヌスの生涯についての近年の研究は以下がある。Stercal, Claudio. *Stefano Harding. Elementi biografici e testi*, Milan, 2001.

²⁶ Cahn, Walter. ‘The Defence of the Trinity in the Cîteaux Bible’, *Marsyas* II, 1962-64, pp. 58-62; Malaise, Isabelle. ‘L’Iconographie Biblique du Cantique des Cantiques au XII siècle’, *Scriptorium* XLVI, 1992, pp. 67-73; Thérél, Marie-Louise. ‘L’Origine du Thème de la “Synagogue répudiée”, *Scriptorium* XXV, 1971, pp. 285-290.

²⁷ Rudolph, Conrad. *Violence and Daily Life: Reading, Art, and Polemics in the Cîteaux Moralia in Job*, New York, 1997.

IV. 結び

12世紀シトー会写本の挿絵芸術は、西欧中世美術の代表作例として確固たる地位を占めながらも、その全体像は未だ不明確なままである。特に、「シトー派第一様式」については、各要素の美術史的研究は分断的であり、シトー会研究史からもやや孤立した状態にあるといっても過言ではない。その理由としては、修道会の発展において燦然と輝くベルナルドゥスの存在がひとつにあるだろう。彼の装飾批判と、それに続くシトー会建築の無装飾性を特徴とする透徹した美は、厳格で禁欲的なシトー会のイメージを裏切ることなく印象付ける。それに反して、草創期の修道院で制作された「シトー派第一様式」の挿絵は、さまざまな苦難と努力が積み重ねられていた環境と矛盾するかのようなイマジネーションに満ちた図像にあふれている。ビザンティン美術の影響を受けた静的で荘厳な「シトー派第二様式」、そしていうまでもなくその後続く簡素な「モノクローム様式」と比較すると、一般に知られるシトー会のイメージとはとりわけ離れているように感じられるのだ。

もちろん、12世紀のシトー会の芸術史を一筋につなげる必要はない。しかしながら、「ユーモラスで奇想にあふれたシトー派第一様式」は、ベルナルドゥスが属した世界とは異質の精神をあらわしているのだろうか。ベルナルドゥスの入信前後の時期は、シトー修道院の基本的な蔵書が整った時期と重なり、彼が本論で扱った写本に接し、挿絵を目にしていた可能性は高い。しかし、『弁明』での装飾批判は、特にクリュニー系の修道院内を飾る彫刻に向けられたものであり、シトーの写本に描かれた同種の挿絵図像を目にしていたとしても、それについて彼が何を思ったのかを知るすべはない。少なくとも初期の写本挿絵においては、聖ベネディクトゥスの『戒律』の遵守を目指して創設された修道院において、その宗教的熱意と厳格さは清貧というかたちでは発露されなかった。しかし、シトー会の基礎固めに専心したステファヌスをはじめとする修道士たちは、一見、ロマネスク美術に散見されるファンタスティックな図像のなかに、ベルナルドゥスに引き継がれる彼らの精神性を組み込んでいったことがうかがえるのだ。シトー会の草創期の歴史学的研究がすすめられるなかで、修道院長ステファヌスの活動に注目することが今後の「シトー派第一様式」研究には必須であり、また、その成果は、限られたシトー会初期史料に新たな材料を加えることにもなるだろう。

(こんどう まほり 本学非常勤講師)

